女性のための情報誌

NETWORK

NO. 15

目　次

特集　学んでジャンプ……2
　◇家庭から自分へ　そして社会へ……4
ウーマンスクランブル……8
婦人問題を通信講座で学ぶ……10
グループ紹介……12
国際交流のひろば……13
ねっとわあく らいぶらりい……14
ポプリ……15
ねっとわあく情報、編集員紹介……16

静岡県

学んでジャンプ

女性たちが何かを学ぼうとし始めるとき、そこには家事や職業との両立、地域のこと、老後のことなど、自分が置かれている条件が影響してきます。

〝趣味教養で〟といいながらも、自分の生き方につながることを求める人が増えています。また、学習内容も、家庭を中心としたことから、自分自身の充実へ、さらに、社会に目を向けることへと深まっていきます。

女性が可能性を生かせる社会をめざして、私たちの**学習**を見直したいと思います。

今の生活からホップ、ステップ、**ジャンプ**……。

特別寄稿　女性問題と学習

東洋大学教授
神田道子

女性の長い歴史のなかで、私たちが生きているこの二〇世紀後半の四半世紀は、一九七五年の国際婦人年、それにつづく国連婦人の十年の間に、国際的、国内的に女性問題を実質的に解決することが課題になった時期でした。その課題をどこまで進めることができるかは、これからの十年にかかっています。女性史に平等を進める土台を創り上げた時代として頁を加え、二一世紀へ引きつぐことができるかどうかは、私たち一人ひとりにとって歴史的な課題です。

そこでこの課題をプラスに達成するのに欠かせないのが学習です。というのは女性問題を解決するには、その問題が見えなければ一歩

も踏み出せません。ところが、戦前のように法や規則で、はっきりと差別されていたりすれば一目瞭然なのですが、現在は差別が見えにくくなっています。特に、性による固定観念や性別役割分業は変える必要があるのですが、長い間、当然とされてき、生活に浸透していますので問題としてとらえにくい傾向がまだのこっているようです。問題がみえなければ、解決する必要は感じられませんから、今の状態がそのまま続くことになります。

ところが現実には、性差別に気づかない態度そのものが問題であり、それで子どもの教育を行なったりすると、意識しないで性による差別をしてしまう、いわば差別をする側に立ってしまうのです。これは大変、恐ろしいことですが、日常生活のなかで「うちは女の子だから学校は適当なところでよい」といった話をよくききます。学校の進路指導などでも、それぞれの子どもの適性を重んじていると思いながら、結果的には、性による枠に押しこめている例がみられます。

このような状態ですから、女性問題がみえる目を持つという第一段階から、すでに意図的な学習が必要なのです。

解決していくには「問題が見える」だけでなく、認識することが必要になります。簡単にいってしまえばその内容、他の問題との関係、原因になっていること、歴史的、社会的関連性をつかむといったことで、深く広く知ることです。よく公民館や婦人会館などで行なわれている女性問題講座は、この部分にあたる学習であることが多いようです。

この場合に欠かせないのは、女性自身の意識や態度にとりこまれてしまっている問題—これを私は内的女性問題といっていますが—と、女性の外側にある問題の両方を関連づけることです。私たち女性は、長い間、性差別を当然とする社会で生きてきており、「女らしく」生き、行動することを期待され、それを受け入れてきていますので、態度や行動に、性差別に原因を持ったいろいろな問題があるのです。例えば「忍耐づよい」のは美徳とされてきましたが、「自分の考えをいわないで耐えること」の問題がそこにはあります。また「ゆずり合い」の美徳は、役員になり手がないという形をとって現われたりします。このような性差別社会のなかで期待されてきた女性の行動や態度にみられる問題を、外側の問題と関連づけてとらえる学習が必要とされます。

問題を認識することは重要なのですが、それだけで終わってしまうのでは、解決することにはなりません。最近、女性問題の学習に参加し、知識は持っているのですが、実際には生活はまったく変わらず、行動をしない人もみられるようですが、これでは学習の意味が半減しましょう。やはり、解決に向かって行動することが重要であり、そのためにはどのような学習が必要なのかが問われるのです。

では活動するにはどのような学習が必要なのでしょうか。活動といっても内容はそれぞれちがってきます。ただどの場合にも、女性が問題を認識すれば、平等な社会を形成していくのに、主体的に参加していくという方向がでてくるのは当然の成り行きです。主体的にというのは、すでに決まっていることを受けて動くのではなく、方針決定にまで参加することです。

そのためにはどのような知識、能力、態度が必要かを考え、それに対応できる学習を組み立てていくことが課題になります。学習に使う資料は、方法は、といった一連の問題がでてきます。

この活動のため学習は、実際の活動から問題をひき出し、その解決をはかるという流れで、くみたて、行なわれていくと考えられます。したがって、この活動に直結した学習の場合は、とくに学習を交流しあうことが重要になりましょう。

「女性問題を見る」、「問題を認識する」、「解決に必要な力量を身につける」ことが、女性の学習の基本的課題であり、それを根にして、多様な学習が展開されたときに、それは、本当の意味で一人ひとりの可能性を拓いていく学習になっていくのです。

プロフィール

神田道子　一九三五年生。東京都練馬区在住。労働科学研究所、海上労働科学研究所を経て、一九七二年から東洋大学に勤務。「教育社会学」、「婦人問題と学習」、「家庭教育」を担当。「成人女性の学習」が現在の主要な研究テーマである。

●学んでジャンプ

家庭から自分へ　そして社会へ

学んだことを、それぞれの立場で、家庭づくりに、自分づくりに、そして社会づくりに生かし、自身のライフワークを求めて、前進している方々を紹介します。女性が学習する意義と状況を、今一度考える手掛かりにしてほしいと思います。

家庭づくり

我が家は音楽一家

松田昌子さん（三島市）

松田さん御一家は、全員のイニシャルをとった「M&Mバンド」を結成し、音楽発表会等の舞台で演奏しています。

長男の美樹君が小一の時ピアノを始め、母親の昌子さんも息子と連弾をやってみたいとレッスンに通いました。その間、隣室の幼児科でレッスンを受けていた長女の真樹さんの音楽的才能が認められ、ラジオやテレビにまで出演するようになったそうです。

夫の幹男さんにドラムを習うことを提案し、二男の幹樹君も加わりました。音楽の輪が家族全員に広がり、仕事が休みの日は合奏の練習で、難しいと言われる父と子の交流も自然にできました。

音楽経験のなかった松田さん一家がバンドを作ったエネルギーの源は、「昭和四十八年七月、長男出産のため経理の仕事を休んでいる間に、毎晩二人で調理師免許取得のための勉強をしました。九月には二人とも合格し、十一月に開店しましたが資金の返済が大変でした。昼は社長の奥さんにみてもらいながら、以前の職場で働き、夜は自分のお店で働きました。」という二人のひたむきさにあるようです。

松田さんは、さらに、中学生になった長男と一緒に朝六時五分からNHKの英語ラジオ講座も始めました。現在も、高一、中二、小五の三人のお子さんとともに、朝食をとりながら続けているそうです。

彼女にとって、働くことや子供を育てることは当然で、さらにそれを豊かにしたいという思いが家族の絆―M&Mバンド―となって表れているのだと感じました。

学びたい人のために

なにかを学びたいと思っても、適切な方法が分からない時は、左記へお問い合わせください。資料、調査方法などを教えてくれます。

県立中央図書館
生涯学習情報コーナー
〇五四二―六二―三七五七

自分づくり

看護婦の資格取得をめざして

村松啓子さん（熱海市）

村松さんは、看護婦、主婦、妻、四人の子供の母親として多忙な毎日を送っています。そんな中、勤務先の病院にお訪ねしました。

村松さんは、十八歳の時から准看護婦として働いていました。結婚して長男出産後二年間休職したのですが、やはり好きな仕事であったことと家庭の中に女が二人いるよりはというお姑さんの理解もあって再び働きに出ました。勤務先の病院長の「人の命を預かっているのに、漫然と働いているのは罪悪だ。」という言葉に心動かされ、また以前から正看護婦の資格を取得したいと思っていたこともあり、学校に行く決心をしました。そこで受験の準備のために高校の通信制課程に一年間、在学しました。

小田原の看護専門学校へは四十歳から三年間通いました。働きながら通学したので、夜勤明けでそのまま学校に行くこともありました。実家の母親が病気で亡くなった時、看護婦でありながら満足な看病ができなかったことや、長男との心の行き違いなど、つらいことがあって断念しようと思ったことも何度もあったそうです。

「卒業式には長男も出席し、答辞を読むのに涙がとまらなくて困りました。三年間なんとか続けられたのも、家族の犠牲と周りの人たちの協力があったからです。」と村松さんは言っています。

周囲の人たちに恵まれていたのも確かですが、何より村松さんの前向きな姿勢と努力があったから、今の村松さんがあるのでしょう。苦労話をさりげなく語る村松さんに、温かい人柄と意志の強さを感じました。

夢を織り続けて十年

天野恵美子さん（富士川町）

三人の男の子の母である天野さんは、下の子が小学校に入学した時、子育ては一区切りとし、自分自身のために何かを学びたいと思いました。編み物や洋裁等、手仕事が好きだったので「手織り」を選びました。

静岡のカルチャースクールで、初めて手織りに挑む天野さんにとって、たて糸とよこ糸が織りなす柄、色、質感は、魅力いっぱいのものでした。そこで知り合った仲間と「グループ虹」を結成し、作品展やデパートの手作り展等に参加し、腕に自信をつけました。さらに、その仲間と勉強会を持ち、染め、糸つむぎ、織りを学び、磨きをかけました。糸つむぎやホームスパン織りは、浜松まで出掛けて行って習得したほど、この時期は手織りが面白く、夢中でした。

手織りを始めて七年目に、御主人が、働き盛りの四十九歳で、静脈瘤破裂という突然の病に倒れ、四日後に他界しました。予期せぬ事態に目の前が真っ暗になり、様々に描いていた夢が打ち砕かれる思いでした。

「主人が亡くなって一年後、周囲の者は、年金でつつましく生きていくことを勧めましたが、当時まだ四十六歳、年金で暮らしていくには若すぎました。三人の子供は、やがて独立していきます。私の『生きがい』を追い求めていくうちに、『手織り』しかないことに気付いたのです。」と当時を振り返ります。

そして、翌年、「夢織工房」を建てたのです。丸太小屋で、手織りのアトリエを中心に、入り口には作品や糸がならび、奥に染場があります。「裏山で採ってきた草花で、糸や原毛を染めて織る――そんな仕事場を持つのが夢」を実現させたのです。「初めは、仕事場だけのつもりが、ここに集まってくる人たちの要望で、小さなお店を持つことになり、さらに近々、喫茶のコーナーも始めることになりました。」と、目を輝かせて